

番外編 調査にまつわるエトセトラ

『産業編』編集のための聞き取り調査でのお話し

町史編集係は、各町史の編集のために、聞き取りをはじめとする各種調査を行っています。

「産業編」担当の係では、西原町の戦前からのさまざま

まな職業について、お話しをうかがっています。

小那覇では、戦前、マチヤグワ（食料・雑貨店）を営んでいた新川ハルさん

（現我謝在）から、シシヤ（肉屋）、豆腐屋、そば屋、



△植物の方言名とその用途についての聞き取り調査（安室で）

薬屋など、当時、旧県道沿いにたくさん立ち並んでいたお店の位置などを聞くことができ、西原で一番にぎやかな小那覇の様子を知ることができました。

我謝では、戦前、戦後と親子二代でタルガー（砂糖樽）作りをされていた小橋川三郎さん

さんから、材料や作り方、仕事の時期などを教えていただきました。

特に印象的だったのは、呉屋での調査の時に協力していただいた、小波津仁徳さん。

小波津さんは、親子二代同じ場所で店を構え、今でも現役のダンパチャー（理容器）です。

小波津さんの理容器になるきつかけを作ったのは、戦時中に防衛隊として南部にいたころ、伸び放題の髭を切ろうと隊長のカバンから盗んだ「ハサミ」。

後に、捕虜となり、ハワイの収容所にいたとき、そのハサミを使い、仲間の髪

を父親の見よう見まねで切ったのが、理容器への第一歩となりました。

戦前は、兼久にあつた製糖工場で働いていた小波津さんの人生を変えた一つの「ハサミ」。

何か不思議な気がしました。

小波津さんのお店には、勤めていた製糖工場の絵が掛けられています。

この絵は、戦後、小波津さんがハワイで沖繩を思いながら描いたものです。

遠く離れた異国の地ハワイで描かれた絵は、小波津さんの故郷・沖繩を思う気持ちそのままに、あたかも製糖工場を目の前にして描いたかのように、正確に描かれています。

「床屋の命は『手と目』だ」とおっしゃる小波津さんは、

そろそろ引退しようと思っ

ているが、常連のお客さんたちから「まだ続けてほしい」、

「手の震えもないのに、今やめたらかえって体に悪いよ」

と言われているとか。実際の年齢よりずっと若く感じられるその姿で、これからもダンパチャーを続けていただきました

と思います。

その他にも、西原の水産業について調べていくうちに、意外なことが分かりました。

伊保之浜（※注①）には糸満のウミンチュ（漁師）が住み、一年を通して漁業を営んでいたということ。男衆

が取ってきた魚を、女のひとたちが、カミアチネー（注②）したり、となり町の与那原まで行き、当時走っていた軽便

鉄道を利用して、那覇の方へ魚を売りに行っていたそうです。

世界をまたにかけていた糸満ウミンチュが、こんな近くにいたとは…。

もちろん、西原にも漁師はいました。

仲伊保（※注③）では、地元の人が漁をしているし、海との関わりが深い

を肥料として入れ、有名なナケーフデークニ（※注④）を作っていたそうです。

昨年八月には、桃原、安室の集落をまわり、植物の方言名とその用途について調査しました。

このほか、これまでご協力いただいたみなさん、どうもありがとうございました。

製糖期が終わるころ、サトウキビや芋の種類、植える時期などを聞きに、町内の諸先輩方のところへおうかがいしますので、その節は、なにとぞよろしくお願

いいたします。

※注①伊保之浜（イホノハマ）小那覇川の下流域の海岸べりに立地し、「小那覇の下」と呼ばれる屋敷集落。戦前は、尚家の別荘「浜之御殿（ハマノドク）」や宜野湾殿内（キンドウテン）の別荘などがあつた。

※注②カミアチネー＝頭上に荷をのせて、行商すること。おもに女性が従事。

※注③仲伊保（ナカイホ）＝中城湾に面した集落。北東側は中城村宇南浜に、南側は伊保之浜に隣接していた。戦後、伊保之浜集落とともに飛行場用地として、米軍に接収され、人々は他集落（我謝・与那城）での生活を余儀なくされた。

※注④ナケーフデークニ＝仲伊保産の大根。仲伊保は土壌（砂地）が大根の栽培に適していた。首里や那覇の市場で、好評であつた。